神奈川県立津久井支援学校 学校運営協議会 開催結果

本校の学校運営協議会を次のとおり開催しました。

会議名称	令和８年度　津久井支援学校　第２回　学校運営協議会
開催日時	令和８年10月13日（火）９時30分～11時30分
開催場所	神奈川県立津久井支援学校　１階 自立活動室
出　　席	学校運営協議会委員８名 事務局９名
会議資料	・第２回学校運営協議会開催要項 ・学校評価報告書（中間評価） ・つくいだより NO.３～５ ・全国コミュニティ・スクール連絡協議会会報

１．開会・司会挨拶

２．校長挨拶

多様な視点から意見や助言をいただきながら、児童・生徒や教職員の思いを大切にしながら学校づくりを進めていきたい。

３．委員挨拶

津久井やまゆり園事件から 10 年の節目に触れ、共生社会の実現に向けて教育と福祉が連携して取り組むことが大切である。

４．学校目標に向けた取組状況の報告

（１）校内評価（中間評価）

① 教育課程・学習指導

今年度から新たな教育課程による教育活動を開始した。高等部では縦割り授業の中でも３年間を見通した年間指導計画を整備し、系統性のある学びを進めている。

また、「つくいタイム」を活用し、生徒の「やってみたい」を引き出す活動を進めるとともに、本校独自の ICT スキルアセスメント表を活用しながら授業改善に取り組んでいる。

＜意見交換＞

委員）「やってみたい」「知りたい」という思いを大切にする学びは重要であり、探究的な学びの出発点になるのではないか。

事務局）生徒の「やってみたい」という思いを大切にしている。一方で、教員の「身に付けてほしい力」とのバランスも必要であり、生徒の意欲を引き出すことを意識しながら取り組んでいる。

委員）教育課程だけでなく個別教育計画との関連を意識し、一人一人の実態や特性に応じた支援を進めることが大切である。

② 児童・生徒支援

個別懇談への本人参加を進めるとともに、日常の観察やアセスメントを活用しながら、児童生徒の思いや願いを把握し、個別教育計画や支援へ反映している。また、ICT 機器を活用したコミュニケーション支援や意思表出支援にも取り組んでいる。

＜意見交換＞

委員）ICT を活用して本人の思いを表現できる仕組みは有効だと思う。一方で、家庭環境による差もあるのではないか。

事務局）小中学部では一人１台の iPad を活用している。学校で使用しているアプリや支援方法を家庭と共有し、自宅でも活用できるよう取り組んでいる。高等部では個人端末の活用も進めている。

委員）学校と家庭が連携しながら支援方法を共有していくことが大切である。

③ 進路指導・支援

小学部から高等部までを通して、将来の自立と社会参加を見据えた進路支援に取り組んでいる。高等部では自己理解・他者理解を基盤として、自己選択・自己決定する力を育成するため、進路学習や実習、企業見学、地域の関係機関との連携を進めている。

＜意見交換＞

委員）自立とは一人で生活することだけではなく、必要な支援を受けながら地域で暮らしていくことも含まれると思う。

委員）本人への支援だけでなく、家族や地域を含めた支援体制もあわせて考えていくことが重要である。

事務局）学校では卒業後の生活も見据えながら、地域や関係機関との連携を進めていきたい。

④ 地域等との協働

校内研究では、「地域と協働して創る学びを通した授業実践の充実」をテーマとして取り組んでいる。学校間交流や居住地交流を実施するとともに、巡回相談や公開研修等を通してセンター的機能の充実を図っている。

＜意見交換＞

委員）地域との協働は、人と人とのつながりを基盤として進めることが大切である。

⑤ 学校管理・学校運営

働き方改革や業務改善、防災体制の充実、ホームページ等による情報発信に取り組んでいる。

また、シェイクアウト訓練や避難訓練、防災研修等を実施し、安全で安心な教育環境づくりを進めている。

（２）各部会の取組の報告

〇切れ目ない支援部会

令和８年７月 28 日に第１回を開催し、「卒業後の暮らしから在学中の支援を考える」をテーマとして協議を行った。進路や就職のみを目的とするのではなく、子どもたちが地域で自分らしく暮らしていくための力を育てることを重視し、「本人参加型支援」「自己理解・自己決定支援」「支援シートIIの活用」等について協議した。

また、支援を引き継ぐ際には、情報だけでなく、「どのような関わり方で力を発揮できるか」といった本人理解を引き継ぐことの重要性が共有された。

〇地域協働・防災部会

６月には避難訓練、９月には高等部１年生による防災宿泊学習への参加・見学を行った。防災宿泊学習では、地域住民約 20 名が参加し、生徒とともに DIG（災害図上訓練）やテント設営等の防災体験活動を行った。

協議では、備蓄食料、通信手段、災害時の安否確認、地域の孤立化の対応等について、地域・保

護者・学校それぞれの立場から意見交換を行った。地域住民からは「津久井支援学校が地域の安心につながっている」との声が多く寄せられたことが報告された。

校長からは、学校防災だけでなく地域防災の視点を持ち、県や相模原市と連携しながら防災体制の充実を進めていることが説明された。

＜意見交換＞

委員）避難所には「安全」だけでなく「安心」が必要である。津久井支援学校が地域にとって安心できる場所として認識されていることは大きな意義がある。

委員）災害時には学校・地域・行政が連携し、地域全体で備えていくことが重要である。

事務局）地域住民にとっても安心できる場となるよう、防災に関する取組を継続していきたい。

（３）重点的取組「つくこれ！」

職員研修「津久井支援学校のこれからを考える（つくこれ！）」について報告した。

「学び」「業務」「環境」の３つの視点から協議を行い、

- 学部間連携、自立活動の指導内容整理、アセスメントの充実
- 行事や業務の見直し
- オフィス改善　　などについて検討した。

その結果、学部間のつながり、アセスメントの充実、働きやすい職場環境づくりを重点事項として整理し、今後の学校づくりにつなげていくことが報告された。

５．協議

（１）地域とともに学ぶ教育課程の推進について

小学部及び中高等部総合学習（ミュージックコース、フードコース、ネイチャーコース、カルチャーコース）の取組について報告。地域の自然・産業・文化・人とのつながりを生かした学習を進めており、今後は地域への発信や継続的な協働関係の構築を目指していることが説明された。

＜意見交換＞

委員）情報発信については、二次元コードや SNS 等を活用することで、より多くの人に活動を知ってもらえるのではないか。

委員）地域との協働は制度や仕組みだけでなく、人と人とのつながりが基盤である。地域活動や自治会活動の中には多くの地域資源があり、学校としても日頃から地域との関わりを大切にするとよい。

委員）地域にはまだ活用できる資源があり、地域施設や地域人材との連携を進めることで、生徒の学びがさらに広がる可能性がある。

（２）職員の声を学校経営に生かすには

事務局より、「つくこれ！」では職員同士が活発に意見交換することができた一方で、職員アンケートには「理想を語るほど業務負担が増える」といった意見も見られたことが報告された。

また、出された意見を具体化する過程で生じる負担や、一人一人が学校づくりに関わっているという実感をどのように生み出していくかが課題として提起された。

＜意見交換＞

委員）職員が学校の将来や働きやすさについて自由に対話できる場そのものが大切であり、意義のある取組である。

委員）すべてを一度に実現するのではなく、重点化しながら取り組むことや、「何が進んでいるのか」「どこまで実現できたのか」を見える化することが大切ではないか。

委員）近年はAIの活用が進んでおり、記録の整理や分析、広報資料の作成等に活用することで、業務負担軽減や業務効率化につながる可能性がある。

事務局）AI活用に関する研修は実施しているが、現状では個人レベルの活用にとどまっている。今後の活用について検討していきたい。

委員）地域団体との連携や人的ネットワークを活用することで、学校だけでは得られない協力や支援につながる可能性がある。

６．まとめ

委員から、本校の地域資源を生かした教育活動や地域との協働の取組について評価するとともに、今後も地域とのつながりを大切にしながら取組を継続してほしいとの意見があった。

校長からは、委員からいただいた具体的な助言や地域ならではの視点は、今後の学校運営を進める上で大変参考になるものであり、本日の意見を今後の学校づくりに生かしていきたいとの謝辞が述べられた。